

2020年8月2日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「主を畏れること」

聖書：出エジプト記1：1～21

エジプトにヨセフを知らない新しい王が現れた。あれから 430 年もの年月が流れたのだから仕方のないことでもあろう。しかし国をつかさどる者が、歴史を知らず、歴史から学ぼうとしない権力者の貧弱さは、どれだけ国を危め、国民を殺めて行くものか。今の日本がまさに歴史を顧みない総理大臣が戦争の出来る国造りに一生懸命になっている。たかが75年前のことですらもう忘れたかのように、悲惨な戦争が無かったかのように振る舞っている。西ドイツの元大統領ヴァイツゼッカーの言葉に、「過去に目を閉ざす者は、現在に対してもやはり盲目となる」という有名な言葉がある。今、日本は過去に目を閉ざしているかのように、戦争が出来る国、戦争の美化が成されている。

エジプト王は、イスラエルの人々の人権を軽視し重労働を課した。このことは、王がイスラエルの民を恐れたからである。恐れは拡大し、民の乳児(男児)を「殺害せよ」と命令する。権力者の恐れは弱者へと向う。いつの時代もそう。沖縄戦、ガマに隠れている幼子が泣けば、日本兵はその親子をガマから追い出すか、幼子を殺す。慶良間島に米軍が上陸すると、おびえる日本兵は島民に自決命令を下す。中国の脅威、抑止力といって日米両政府は、辺野古に新基地建設を強行する。権力者の“恐れ”は、弱者へと向かう構図がいつの時代も変わらない。

助産婦の二人の女性は、直接エジプト王から命令を下された。命令に背けばどうなるかは重々知っていたはずである。では何故、彼女たちは王の命令に背いたのか？ 王に対する恐れはなかったのか？ 当然、その恐怖は相当なものであろう。しかし、新しく生まれてくる命を目の前にした時、小さな、弱々しい赤子が、一生懸命に生きようとする命を見た時、エジプト王に対する恐れよりも、神を畏れ敬う思いが勝ったのではないか。「神を畏れ、悪を避けよ」という主の声が聞こえてきたのではないか。この二人の女性が、エジプト王をも恐れぬ信仰者、信仰者の鏡というところから、入っていくというよりも、ごく当たり前の“命の尊さ”“命どう宝”というところから、神を畏れ敬う思いに繋がっていく、「神を畏れる」という聖書の言葉が、私の事柄になっていく、そういうことではないかと思う。

時代は、権力者、男性が動かしていると思っていないか。そう考える者へ“否”というべきである。二人の女性の「神を畏れる」信仰が、一つの時代を動かしたことを覚えたい。(神谷)